

ベンツに乗った ネタキリロージン

時速 170 キロも出せるBMWエンジン搭載の車椅子を、愛する息子に作った男。「普通のオートバイが霞んで見える」と記者が評した。想像するだけでもワクワクする。

「ワクワク福祉」の条件とは？ 福祉関係者の「普通より若干低め」では勿論なく、「普通より遥かに高いレベル」だ。



モビリティ・コンクエスト社の宣伝写真

住民流福祉総合研究所

木原 孝久

〒350-0451 埼玉入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話・049-294-8284

Eメール kiharas@msh.biglobe.ne.jp

ホームページ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~waku/>

弱者はとんでもないことを考えている

<はしがきに代えて>

「ベンツに乗ったネタキリロージン」―読者はこのタイトルからどんなことを考えるだろうか。福祉サービスの受給者の心理の奥底を推測してみたら、こんなとてつもなく贅沢な望みを持っているかもしれないのだ。時速170キロも出せるBMWのエンジンを搭載した車椅子、火炎放射器付きの戦車型の車椅子を、愛する身内のために作り出したアメリカ人。取材に来た記者に「これに乗れるのなら、足を折ってもいい」と言わせた。

同じ「車椅子」でも、乗っている者の気分には天と地の差がある。もし同じ発想で様々な福祉サービスが作られたら、どんなに楽しい気分になれるだろうか。想像するだけでもワクワクする。そう、ワクワクするような福祉は現実にはありうるのだ。

一般に福祉の対象者に保障すべき水準は「一般市民向けより若干低く」を目安としている。しかし今ここで紹介しているのは、「一般市民と同水準」でさえもなく、「一般市民向けより遥かに高い水準」である。

福祉関係者は要援護者にこんな高いレベルの福祉を提供しなければ、とは考えない。最後は当事者が自らの手で実現していく（させていく）より仕方がない。

<目次>

- 1.福祉が疎まれる理由がわかった／3
- 2.イメージ逆転は一般より遥かに高レベルで／5
- 3.火炎放射器付きの車椅子だぞ／8
- 4.5種の足を使いこなすファッションモデル／10
- 5.障害者の店だからこそ超高級品で勝負／13
- 6.超高級福祉を実現させる「フェアネス」／15
- 7.要援護者の一見、不可解な行動／17
- 8.弱者は何を求めているのか？／20
- 9.「弱者の戦略」としての福祉／26

1. 福祉が疎まれる理由が分かった！

■自費出版にマスコミが反応

今から30年ほど前、私が勤めを辞めてフリーになった時、何冊かの本を自費出版し、関係者などに配布した。その一冊が「ベンツに乗ったネタキリロージン」だった。自家印刷の粗末な冊子であったが、驚いたことにA新聞とB新聞がこれに取りついた。

その年の9月15日、敬老の日の朝刊の、A紙は「人」欄に、そしてB紙は「火曜インタビュー」という欄に大きく掲載された。A紙のタイトルは「寝たきり老人をベンツに乗せろ」。B紙は「寝たきりになってもおしゃれを」。

その冊子にはこういうくだりがあった。あのころはゲートボールが流行していた。運動場よりも狭い空間に、あまり身なりには気にしない高齢者が夢中になって興じている。それはそれでいいのだが、休憩所は文字通りのバラック。それを通りがかりに見ていて、「俺もいずれああいう世代になるのか」と思うと気が重くなった。

もし彼らが、ゴルフコースのような綺麗なコートで、ゴルフウェアならぬゲートボールウェアに身を包み、バラックならぬクラブハウスで一休みする光景を目にすれば、自分の未来ももっと明るく見えるのではと、書いたのだ。B紙の記者はインタビューの中でこの話を持ち出した。「私も出勤の途中で毎日、その光景を目にするんですが、全くあなたと同感ですよ」。

■入所者にあんなみすぼらしいなりをさせる施設

たかが外見のことにそんなに目くじらを立てることはあるまい、と言うかもしれないが、じつはこの外見が意外に重要なのだ。

私の住んでいた町に障害者関連の施設があって、若い職員が数名の入所者を散歩させていた。知り合いの住民に聞いてみた。何人かが行列を作って散歩しているのを見たことがありますか。「ありますよ。あれ、施設の人たちでしょ」と、聴きもしないのに答えてくれる。どうして施設の人とわかるんですかと突っ込んでみると、「だって、いい年をした人が、丸坊主で、しかもトレーナー姿、運動靴を履いているなんて、他にいませんよ」。夫がそんな恰好で外出しようものなら、「あんた、や

めてよ。みっともないじゃない！」と怒られるに決まっているのだ。そして彼女はこう続ける。「あの若い人が職員でしょ」。あの貧しいなりをした職員が、入所者に豊かな処遇をすることはあり得ないと、見抜いているのだ。

■入所者がグッチのバッグを下げていたら？

いまだに福祉施設反対運動が各地で起きているが、あれはこういう実態と関係があるのではないか。施設反対の理由はいつも変転するが、最後に行きつくのは「地域のイメージダウン」そして「地価が下落する」だ。福祉施設は税金で賄われている。だから普段の生活もつましくと、職員は考える。が、その結果が「イメージダウン」と言われるのでは、考え直す必要がありそうだ。

もしもの話だが、施設から出てくる入所者が、グッチのバッグを下げ、アルマーニのセーターをカッコよく着込んでいるのを住民が見たら、どういう感慨を催すだろうか。「税金を使って、あんな贅沢をさせるなんて…」と憤慨するかもしれないが、「地域のイメージダウン」とは言わない。施設反対も起きまい。

2.イメージ逆転は「一般より遥かに高レベル」で

■「並み」の水準では暗いイメージを覆せない

なぜ「グッチ」で「アルマーニ」なのかと言いたいかもしれないが、これが意外に重要なのだ。目立たぬように、ごく普通のバッグとセーターを身に着ける、ではダメ。その程度の「おしゃれ」度では、住民の施設に対するマイナスイメージを引っ繰り返す力にはなりにくいのだ。既に住民の意識の底に貼りついているイメージがかなり強固である場合、よほどショッキングな出で立ちをしないとだめだということである。

■賭博場やキャバレー貸し切りでのデイサービス。いいねえ

デイサービスセンターの人たちから聞かされる愚痴の1つが、「施設名が書かれた車で、家の前に止まらないでね」と言われることだ。アタマ来ちゃうわ、とでも言いたくなる。

では、もし迎えの車がベンツだったらどうするか。あるいはリムジンだったら。おそらく利用者は、お隣さんに見せびらかすように、しゃなりしゃなりと家を出てくる。ホンダのシビック程度では駄目で、ここはやはりベンツがいい。

「しゃなりしゃなり」は別として、本人が誇りをもってサービスを受けられるようになったこと自体、大変な違いだとは思われないか。

この話をある社会福祉協議会の職員に話したら、たまたま理事長がベンツを持っているので、敬老の日だけでも、それを内緒で使ってみようかなと、冗談半分、まじめ半分で言っていた。

住民のイメージを変えるだけではない。当事者自身の福祉サービスに対するイメージを変えるためにも、デイサービス自体を、超豪華にする必要がある。最近、キャバレーを借り切った夜のデイとか、賭博場でのデイといった、面白デイがはやり始めた。これで住民のデイ利用への抵抗感が薄らいでいくに違いない。この場合も「賭博場」「キャバレー」がポイントになる。

■「超高級レストランで働く」で精神障害者のイメージが変わる

障害者の作業所といえば、そこで何が行われているか、住民も薄々はわかっている。段ボールの解体とか、贈答用の箱作りといった作業をしている。障害があるのだから、こういう作業しかできないと言うだろう。だが、そういうことをしている間にも、住民の作業所に対するイメージだけでなく、障害者そのものへのイメージもできてしまうのだ。ああいう作業しかできない人たち、という。

私が中央共同募金会という「赤い羽根」運動の組織に在職していた時、「ハウツーバザー」という冊子をまとめた。部下たちに各所で開かれているバザーを見学させたが、その一人が障害者の作業所で作られたエプロンを買ってきた。

センスのいい職員で、「お情けに買ってあげる」はずがない。なぜ買ったのかと聞いたら、「だって、センスいいもん」。そこで彼女、作業所の職員に聞いてみたら、何のことはない、プロのデザイナーに型紙を作ってもらったのだと。だから何着作っても、センスのいいエプロンが出来上がる。結果として障害者のイメージも変わる。だから職員が「プロのデザイナーを活用しよう」と思うかどうか、なのだ。

あとでも紹介するが、舞鶴市で超高級レストランに仕立てた店に精神障害者などが雇用されている。障害者の店の建設に反対していた地元の人たちも、「こういう店だったら、わし、反対せんもの」と言い訳をしたという。そのために支配人は、超高級レストランのシェフをリクルートした。店は数億円かけて建てた。

こうすることで、精神障害に対するマイナスイメージが覆る。そんな表面的なこと、と言いたいが、実際にそういう表面的なこと、簡単にイメージは逆転できるのだ。それに障害者自身の意識も変わるはずである。

■「一般並み」でも駄目。「一般より遥かに高レベル」に

ここまで述べてきたことはじつに簡単である。福祉のイメージを上げるためには「今まで（の福祉レベル）よりも若干高め」に処遇を改善する、のではない。「福祉レベル」を飛び越えて、「普通（一般人）並みの水準に」することでもない。「一般の水準よりも遥かに高いレベル」にするのだ。とにかくこれを実践すれば、福祉の暗いイメージは払しょくされる。

福祉のイメージ払しょくだけではない。福祉サービスの成果もまた変わってくる

のだ。徳島・鳴門市の老人病院で、資生堂の協力で認知症の人に化粧教室を開いたらどんな成果が出できたかを、あとで取り上げている。

それよりも、この「一般並み以上のレベル」を誰が一番望んでいるかといえば、当事者本人なのだ。自分が福祉サービスを受けなければならない境遇になったことが、本人を傷つけている。それを癒す道の1つは、サービスの質が飛び切り高いことである。「ざまあみやがれ、こんなサービスにあやかりたいなら、お前も要介護になってみやがれ」である。

■「ワクワクする福祉」は作れるのだ

読者はとんでもないことと思うかもしれないが、もともと福祉という営みがめざしているのはこのように、今の水準よりも、とてつもなく高いレベルなのかもしれないのだ。

もしそれが実現した時に、福祉の与えるイメージは、大きく変わる。冗談でもいいから、敬老の日に、寝たきり老人がベンツで老人福祉センターまで運ばれているのを想像してみてほしい。障害者がBMWのエンジン搭載の車椅子で、制限速度を大幅に超え、違反切符を切られているのを想像してみたらいい。

福祉がいつも、一般水準よりも低いレベルでおとなしくしているから暗くなるのだ。そこで施設や障害者、「老人」への偏見が生まれる。本人も利用するのをためらう。という意味では、福祉をワクワクするものにするのは、絶対に必要なことであるし、またそうする方法はあるのだ。

3.火炎放射器付きの車椅子だぞ！

■「これは法的には戦車です」

イギリス人のジム・スターさん（36歳）。彼は現在、関節炎や腰痛で車椅子を利用しなければならないが、「車椅子にやさしい」所しか走れない通常の、軟弱な車椅子にうんざりしていた。そんなジムさんに友人がプレゼントしたのが、マッチョでアウトドア派な彼にぴったりの「戦車型車椅子」（下の写真）である。



山だろうが砂漠だろうが雪道だろうが、どんな所でも軽々と走行できてしまう。ただし、問題が1つ。「運転者・車両免許局」からストップがかかったのだ。「申し訳ありませんが、あなたの車椅子はもはや、車椅子とは言えません。これは法的には…戦車です」。これは「戦車」なので、公道を走る

には戦車の免許が必要だというのである（Themurcury.com）。

ここで問題なのは、友人がジムさんのために作った車椅子が「あまりに戦車っぽかった」ことだろうか？ いや、それよりもむしろ、車椅子メーカーがこれまで、戦車と認定される可能性などこれっぽっちもないような車椅子ばかり作ってきたことに問題があるのかもしれない。そう思わせる事例は、他にもある。

■「普通の男性が羨むような車両」に兄を乗せたい

ネットで検索していくと、男性たちの圧倒的な支持を得ている車椅子がある。アメリカのテレビ番組「バトロボット」（ロボット同士を戦わせる番組）でロボットを製作していたランス・グレイトハウスさん特製の「ロード・ヒューモンガス」だ。

「火炎放射器付き車椅子」で、ほぼすべての地形に対応できる車輪を装備。座席は海洋レスキュー隊のヘリのもので、4.5mの炎を発射することができる。

ランスさんはこれまで、クールでクレイジーな乗り物や機械を趣味で製作してきたが、兄がパーキンソン病になった時、「見るからに医療



器具そのままの」車椅子ばかりであることに疑問を抱き、「普通の男たちが羨むほどカッコいい」車椅子に寄せようと決心した。

しかし「カッコいい」を実現するためになぜ火炎放射器まで必要なのか？日本の「カッコいい車椅子」を検索すると、出てくるのはデザインを工夫した車椅子ばかりだ。だがそれだけで健常の男性たちに「こんな車椅子なら乗りてえ！」と思わせられるだろうか？ 答えはノーだ。では「ロード・ヒューモンガス」ならどうか？

ネットマガジン「ギズモード」の記事でこの車椅子を紹介した男性記者は、こう言い切った。「この車椅子に乗るためなら、オレは自分の足を折りたくなる！」—これこそ、アメリカ人が自分の身内に実現させたいと思う車椅子なのだ。ランスさんの今後の目標は「カスタムカーのようなカッコいい車椅子をつくること」である。

■時速 170 キロも出るBMWエンジン付き車椅子

モビリティ・コンクエスト社が販売している「車椅子用自動三輪車」は、車椅子のまま乗り込める大型のオートバイで、社長のアラン・マーティンさんがスキー事



モビリティ・コンクエスト社の宣伝写真

故で車椅子になった息子のためにつくったものだ。

障害者用だからと甘く見たら大間違い。BMWのエンジンを備え、最高時速は170 km、7.6秒で時速96.6キロまで加速することができるパワー派であるばかりか、男性記者たちが「普通のオートバイがかすんで見える」と言うほど、迫力のあ

る美しいボディを実現した。ネットマガジン「クラックド・コム」の記者は書いている。「このバイクはオートバイの良さをすべて備えており、より安全な上、一般的なオートバイを走り負かすことができるのだ。そして何より、見た目がくそカッコいいじゃないか」。(木原理恵・本研究所)

モビリ

4. 12種の足を使いこなすファッションモデル

■「彼女はなによりもゴージャスだった」

前の記事で車椅子を利用する男性の「カッコよさ」を実現する試みについて取り上げたが、今度は女性の美しさへのこだわりについて見てみよう。

障害者と複数のキーワードに検索をかけると必ず見つかる名がティファニー・カールソンさん（30歳）だ。

14歳という多感な時期にダイビング中の事故で脊髄を損傷し、車椅子の生活になったティファニーさんは、「ああ、これで私の人生は終わった」と諦めた。おしゃれな服を着ることも、メイクも髪形も、何ひとつおしゃれをしないまま十代を過ごした。

しかし高校卒業後、リハビリセンターで目の覚めるような出会いをする。そこでインストラクターをしていた半身不随で車椅子の女性は、ティファニーさんが抱いていた「障害者」のイメージを一変させたのだ。

「彼女は、私が不可能だと思っていたことをすべて実現していたの。美しい服を着て、結婚して、3人も子どもを生んで、可愛い車を運転して、フルタイムの仕事に就いて、そして何より、彼女はゴージャスだったのよ！」。



<写真>ティファニーさんのホームページより

障害者イコール「おしゃれじゃない服に運動靴」というイメージは、欧米でも根強い。だが障害者であることと、「ステキ」どころか「ゴージャス」であることは両立できるのだと知ったティファニーさんは、人生観が一変し、生きる気力が湧いてきた。そして今度は自分が、それを他の女の子たちに教えてあげようと決心する。

■障害者をデートに誘う法

大学でマスコミュニケーションを学んだ後、障害者のためのおしゃれ情報を専門に発信するライターになった。自身のブログ「BeautyAbility」では車椅子の人が着られるファッションの最新情報や、「車椅子の女の子をデートに誘う法」といった話題を提供している。不自由な手でどのようにメイクをするのか、コツをホームビ

デオにまとめ、「ユーチューブ」で公開してもいる。

最近ティファニーさんが紹介していたのが、デザイナーのイジー・カミレリさんがトロントにオープンした、車椅子の人のためのゴージャスな店だ。アンジェリーナ・ジョリーやニコール・キッドマンといったハリウッド女優の服をデザインしてきたイジーさんが、座った姿勢に合わせてつくった服ばかりで、トレンチコートやウェディング・ドレスまで販売している。



「たかがおしゃれ」と言う人もいるだろう。だがティファニーさんは言う。「素敵な格好をすることは、心の健康に驚くべき効果があるのよ。それに、普通に歩いている人たちと自分は同等なのだと、実感できるの」（「Ai Insite」記事より）。

エイミー・ムランさんがモデルをつとめたケネス・コール社の広告

■自由に足を取り替えられる

障害者と美と言えば、大手化粧品会社「ロレアル」パリ社のイメージ大使に選ばれたエイミー・ムランさんもいる。

エイミーさんは腓骨（下肢の細い骨）を持たずに生まれたため、両足を切断。義足のアスリートとして、パラリンピックで複数競技の世界記録を更新し、その後はファッションモデルや女優としても活躍している。

エイミーさんは言うまでもなく美人だが、これまでジェニファー・ロペスやビヨンセといった超大物の美女たちが務めてきた役に、知名度では劣るエイミーさんが採用された上、義足を隠すのではなくそれを生かしたCMが作られるということは、障害を含めた一人の女性としての美しさが認められたと言える。

ではエイミーさんは、どのように特別なのだろうか？ エイミーさんについて最も有名な事実と言えば、彼女自慢のコレクション—12種類の義足がある。ない足を補うためだけなら、1足あれば足りるはずだが、彼女はそうは考えていない。せっかく自由に足を取り替えられるのだから、単に歩ければいいというのではなく、義足だからできる方法で人生を豊かにしようと考えているのだ。

例えば、走るための義足は、チーターの後ろ足を研究してつくられたカーボン・ファイバー製。きれいに見せたい時は、バービー人形風の美足がある。どれもオーダーメイドで、用途に応じて12種類を使い分ける。

■失った足の代替品ではない

エイミーさんの名を広めた活動の1つが、TED会議で行った、義足の可能性についての講演だ。TED（テクノロジー、エンターテインメント、デザインの世界をつなぐ会議を主催する団体）がHPで公開した映像が感動を呼び、多くの人が視聴している。その中で、彼女がこんな話を披露している。

エイミーさんは義足のおかげで、5種類の背丈を選ぶことができる。その中のお気に入りの1足は、背をすらっと高くし、彼女をモデル体型にしてくれる逸品だ。その義足が完成した時、マンハッタンでのおしゃれなパーティーにつけていったところ、そこに彼女を長年知っている女友達が来ていて、エイミーさんの姿を見た途端、口をあぐりと開けて叫んだ。「あなた、背が高いわっ!」。彼女が得意気に「そうなの。これいいでしょ?」と言うと、その友達はエイミーさんの目を真っすぐに見て、こう言った。「でもエイミー、そんなのって…フェアじゃないわ」。エイミーさんは聴衆と一緒に楽しそうに笑いながら、興奮気味に語った。

「何がおもしろいって、彼女は本気でそう言ったのです。このとき私は、この10年間で社会は変わったと悟りました。もう『欠けたものをいかに補うか』という問題ではなくなったのです。足がないことに新たな可能性が生まれるのです。義足はもはや喪失した足の代替品ではありません。それを身につける人が、そのスペースに自由に、創りたいものを創れるということです」。

彼女はそれを実現するために、既存の医療装具業界の外にいる、科学や芸術の専門家たちに、その才能を提供してくれるよう訴えかけた。現在の医療装具が、欠けた身体の代替品以上のものになるには、最新の科学だけでなく「アート」、つまり「美」も必要だと彼女は言う。

「美は、重要なものです。美は、人々が目を向けないもの、こわいと思うものを芸術品に変え、もっとよく見てみたいと思わせ、もしかしたら理解することさえ可能にしてくれるかもしれないのです」。(木原理恵・本誌)

5. 「障害者の店」だからこそ超高級品で勝負

■障害者を一流のショコラティエに！

日本財団の「ゆめちょ総選挙」（寄付金付き自動販売機「夢の貯金箱」の寄付金の使い道を投票で決める事業）で今年選ばれた企画の1つが、「高級ショコラ作りを福祉施設がリードする」ことを目指すプロジェクトである。著名なトップショコラティエと協働して商品企画や開発を行った上で、全国の就労支援施設に技術移転を行い、研修施設の整備やショップの立ち上げ支援も実施する予定という。

日本財団のサイトに掲載された夏目浩次さん（ラ・バルカグループ代表）のインタビュー記事によれば、日本に専門の職人が少ないチョコレートは、じっくりと地道に手をかけることでこそ美味しい製品が生まれるため、丁寧に手作業をすることの得意な障害者にピッタリなのだという。

■安倍総理も利用した超高級フレンチ・レストランも

「障害者の店だからこそ、敢えて高級品で勝負する」という方法は、飲食業界で既に成果を収めている。

2009年に東京・世田谷区で“隠れ家的な本格フレンチ・レストラン”として「アンシェーヌ藍」をオープンしたのは、「社会福祉法人・藍」だ。料理長以外のスタッフが知的障害や精神障害を持つ人だとは気付かずに帰っていく客もいるという。

「誰もが『すてきね』と言うような場所で働く権利が障害者にもある」と話すのは理事長の竹ノ内睦子さん（毎日新聞）。去年は、安倍総理もお母さんの誕生日祝いにこの店を利用したとか。

先日NHKで取り上げられたのが、京都府舞鶴市の高級フレンチ・レストラン「ほのぼの屋」だ。スタッフは統合失調症や知的障害、難病などを抱える人だが、「予約のとれない店」として人気を博し、年間50組のウェディングも手掛け、最近では「一泊ディナー付きで1人2万円以上」のプチホテルも始めるなど、まさに「福祉の店」の常識とイメージを根底から覆す発展を遂げている。

これを実現させたのは、「支配人」である西澤心さんの並外れた情熱とパワーのようだ。舞鶴湾を一望できる一等地に、2億5千万円の建物、そしてグルメファン

に名を知られた超一流のシェフを揃えた。従業員を指導したのはホテルの接客インストラクターだ。

■地域の人にも「誇りの店」

「福祉のレストラン」が、普通の店に肩を並べたというよりも、もはや一般的なレストランのレベルをも超えた時、どんな効果が生まれるのか。

まず、この店では原価率を高め設定し、テーブルも少なめで、回転率を上げることも意識していないという。従業員数も多いのでワークシェア的な要素もあるが、それでも月収15万円というスタッフもいる。

こうしたスローライフならぬ「スローワーク」とでも言うような、普通よりは緩やかな働き方ができるおかげで、障害の特徴である強いこだわりや几帳面さを生かしたサービスを提供できている。そのゆとり感とこだわりのサービスが、客にも好評なのだ（「WamNet」記事、NHK「ハートネットTV」）。

もう1つは、「障害者の店」というイメージに、店の高級性が完全に勝ってしまったことだ。建設前は地元住民の反発が強かったが、いざ完成した店で住民をもてなしたところ、一番反対していた男性がこう言ったそうだ。「こんなええもんができるんやったら、わし、反対せんかったのに！」（「ノーマネット」公開の西澤さんの講演録より）。地域の人にとってこの店は「誇り」になっており、海水浴客にも「高台におしゃれなフランス料理の店がありますよ」と教えているそうだ（「いらっしやいませ「ほのぼの屋」へ」（高橋清久・藤井克徳・まいづる福祉会・まいづる共同作業所運営委員会編著／クリエイツかもがわ発行）。（本研究所・木原理恵）

6.超高級福祉を実現させる「フェアネス」

ここまで紹介してきたような、とてつもなく高いレベルの福祉はどうしたら実現するのか。少なくともアメリカの二つの事例で見えてくるものはある。とんでもない車椅子は誰が考案したのか。当事者の身内だ。当事者の気持ちを真に思いやれる立場という、身内しかいない。あの医療機器仕様の車椅子を兄には与えられないと、弟が考え出した。

もう一つの要素は、アメリカやイギリスの風土としてあるフェアネスの風土だ。ハンディを抱えた人に提供すべきは、一般よりも低い水準のサービスではない。もともとハンディがあるのだから、一般よりも低い水準のサービスを与えられたら、ますます低いレベルの生活になってしまう。そうではなくて、一般よりも高い水準のサービスを提供されなければならない。これがフェアネスの原理である。

■サムスンの技術者が少年院生に国家資格を取らせる

韓国のある少年院の処遇が話題になった。その少年院では、院生一人ひとりにパソコンを与えて個人指導をしているという。指導者にはあの有名な「サムスン」の技術者も加わっている。希望者には国家資格も取得できるようにしている。

資格取得前に「退院」の時期が来た院生が、「あと少しで資格が取れるので、もうしばらく（少年院に）居させてほしい」と言ったという。そのためもあって、「退院」時には企業から求人が来ているのだと。

これに韓国の国民は反発、「うちの子でさえ、パソコンが与えられていないのに…」と。これに少年院側はどう反応したか。「それじゃあ、あなたのお子さんを少年院に入れますか？ イヤでしょ？」。この子たちは大変なハンディを負っている。退院したからと言って、まともな仕事があるわけでもない。これぐらいの「逆差別」で文句を言うなというわけだ。こうして退院した少年たちが、社会のあちこちでパソコンの技術者として活躍するようになれば、少年院や院生へのイメージが変わってくるかもしれない。

■「ハンディは自力で克服しろ」と突き放す日本

わが国にはそういう伝統はない。むしろハンディのあるものは、自力で克服しなさいと言う。誠に厳しい風土ではある。その中でも、例えば舞鶴市の精神障害者を雇用したレストランの経営者のように、突然変異のように出現するのみだ。

女優（タレント？）の宮城まり子さんもそんな突然変異の一人だろう。障害を持った子どもの養護施設を経営している。

二重にハンディを負った彼らに彼女は何をしたか。彼らに絵を描かせているが、そこに超一流の画家を指導者に招いた。子どもたちの絵を生かしたカレンダーが販売されているが、いわゆる高級カレンダーだ。

また彼らにダンスを習わせたが、やはり超一流の指導者を付けた。子どもたちがブロードウェイでダンスを披露した時、あちらの高名なダンサーが「障害児としてでなく、ダンサーとしてワンダフル」と絶賛したという。

■自身豊かでないと豊かな福祉は構想しようがない

豊かな福祉、しかも要援護者に一般人よりも遥かに高いレベルの福祉を実現させようと考え付くには、それだけ、自身、「豊かな生活」というものの味を知らねばならない。要するに豊かな生活を送っている人にして、これを構想できるということである。

かつて電通だったか、公明なコピーライターが自殺した。残された遺書には、豊かでないのに豊かな生活を考えることはできない、といったことが書かれてあったという。

という意味では、福祉を担う福祉関係職員はもっと豊かな生活を送り、その味を知らねばならない。障害者の作業所の職員には、障害児に（売り物にする）エプロンを作らせるには、プロのデザイナーをつけなくっちゃ、ぐらいは考え付くセンスは身に着けさせる必要がある。

7.要援護者の一見、不可解な行動

■「要援護者は素直にサービスを受けるはずだ」？

フェアネスが理解できないわが国では、やはり当事者が奮起しなければならないのかもしれない。そこでここからは当事者の側から福祉を考えてみよう。

ところで、福祉は担い手と受け手の関係で成り立つが、私たちは普段、担い手の立場から考える。そこから「受け手」はどう見えるのか。

問題を抱えている人は、当然その問題を解決したいと考えているし、解決してくれる機関まで出向くだろうし、首尾よくサービスが提供されるとそれを喜んで受け取るはずだ、という前提で出来上がっている。だから、その「対象者」がちょっと不可解な行動を見せると、不審な目を向ける。時には不快感をあらわにする。「援助を受ける身なのに…」

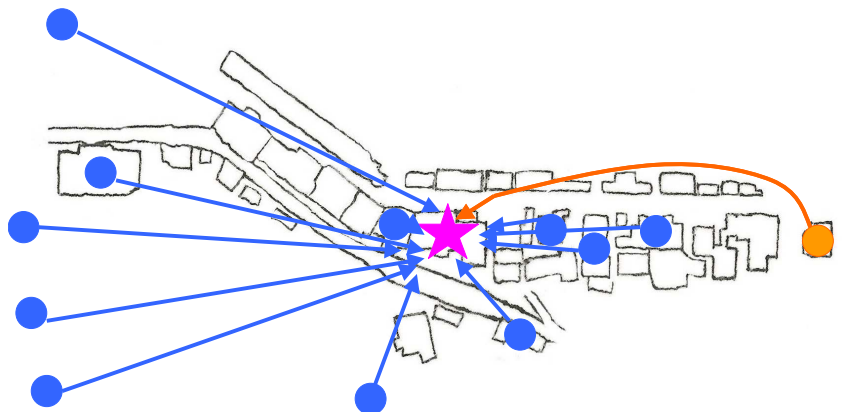
■「引きこもりの人への嫌悪感」を露わにする関係者

支え合いマップづくりをすると、ご近所ごとに一人か二人、引きこもりの人がいる。見守りボランティアや民生委員が訪れても、ドアを開けない。「なぜなの？」とボランティアも民生委員も不可解、といった顔をする。せつかくこちらが善意で訪問してあげているのに、ドアを開けないなんて。一体どういうわけなのか。

こういう人への住民や関係者の視線はかなり厳しい。ケース検討会では、サービスを拒否したり、訪問を断る人に対しては、「頑固」「プライドが高い」などと表現する。まあ、可愛げがない、ということではないか。私自身、プライドが高い方なので、要援護者になったら関係者に嫌われるだろうなど今から心配だ。

■なぜ助け手の悪口を？

岡山県で支え合いマップづくりをしていたら、認知症の一人暮らしの女性が見つかった。周囲のたくさん



の人に支えられている。11人も支え手がいて、見守ったり、食べ物を持参していた。ところが彼女、11人全員の悪口を言っているという。世話になっているのに、なぜか。彼女が悪口を言わない相手が一人いた。この人は11人が持ってくる物を持ち去る。彼女を食事や買い物に連れ出しては代金を払わせている。彼女を食い物にしているのだが、この人の悪口だけは言わない。

講演で、このマップを示して、彼女の行動をどう思うのか、なぜ彼女は私たちの想定とは正反対の行動を取るのか、聞いてみるのだが、「わからない」と首をかしげる人が少なくない。ボランティアの悪口を言う不心得な人、と思っている。

この線の中から、彼女が悪口を言わない一人をいったん消してみる。そうすると彼女に向かって11本の線が集中する。これだけの善意を受けたとき、本人はどんな気持ちになるか、想像してみればわかるのではないか。

人間には誇りというものがある。人から善意を受ければ、その誇りが潰される。負債を負った気持ちになる。その相手が11人にもなるとすれば、尚更だ。そうすると、自分が優越感を持てる相手を大事にしたくなる。彼女はこの人物について、こう言っている。「あの人は可哀そうな人でね。私が面倒見てあげているの」。

■「ボランティアとしてなら行く」？

若年認知症になった夫に「悪いけど、今日は忙しいからデイサービスに行ってくれる？」と妻が言うと「いやだ」。ではどうしたら行ってくれるのか。「(デイサービスセンターへ) ボランティアをしに行くのならいい」と答える(むろん利用料は規定通り支払うのだが)。実際に本人には「自分はボランティアに行っているのだ」と思わせてデイサービスへ通わせている家族も少なくない。

この男性の気持ちも、認知症の女性と同じような心理で見えていけば、理解できるのではないか。ところが実際には、こういう男性を(利用料は徴収する条件でも)

「ボランティア」として受け入れる寛容なデイサービスセンターは意外に少ない。

対象者を、今までのように単純素朴な存在ではなく、その人なりにいろいろ考えている「生きた存在」と考え直してみたらどうか。そんなことは、当たり前のことで、いまさら私が真面目くさってということではないが、今の日本の福祉界では、こういう初歩的な議論をしないと前へは進めないのだ。

■「弱者は複雑で、悪心を持つ」

「弱者」という言葉がある。体力的に虚弱な人だけでなく、就活に失敗した時、派遣切りに遭った時、出世レースからはじき出された時など、人生のどこかで「自分は弱者だ」と自覚する時があるだろう。心身に障害を抱えた時や病気になった時、つまり福祉・医療サービスの対象になった時にもむろん弱者意識は押し寄せる。

昔から様々な哲学者や思想家が弱者論を展開している。人は弱者という意識を持った時、独特の心理的な反応を示す—そこが面白いからだ。ニーチェが言っている。「病気で弱い者は、独自の魅力を持っていた。彼らは健康な者よりも興味深い。要約すれば、病気で弱い者の方が同情心に富み、人道的である。彼らの方が才知に富み、むらっけで、複雑で、愉快で、悪心を持つからである。悪心を発明したのは病者を置いてほかにない」（「権力への意志」）

なぜ弱者は「悪心」を持ちやすいのか。ある哲学者はこう述べている。「力は墮落するとしばしば言われている。だが、弱さも墮落するのを悟ることが、おそらく同じぐらい重要だろう。憎しみ、敵意、粗暴、不寛容、疑念、これらは弱さの所産である。弱者の憤慨は、彼らになされた不正行為が原因ではなく、自分たちの不完全さと無能力さを感じ取ることからきている」（エリック・ホフファー〈米国の哲学者〉「変化という試練」）。

私たちは人から善意を施されなければならなくなった時、激しい屈辱感、敗北感に襲われる。大事な誇りを潰された時、一見不可解な行動に出る。自分に善意をもたらした人への感謝、ではなくて敵意や憎悪。逆に自分を貶める人への寛容さとか。それが前述の岡山のケースだと考えればいい。

福祉の対象者を「弱者」という観点から眺めてみたらどうか。「弱者の意識を強烈に持った対象者」（受け手）をイメージしながら、弱者でさえ喜んで受け取ってくれるサービスのあり方を考えていけば、福祉はもっとうまくいくのではないか。

8.弱者は何を求めているのか？

弱者は（福祉サービスを受けるに際して）どんなことを考えているのか、どんな対応を願っているのかを、10項目並べてみよう。

(1)「健常者より上」に立てるなら

人間は善意やサービスを受ける立場に置かれた時、屈辱感を味わう。担い手よりも下位の位置に置かれたと感じる。そんな弱者が心休まるのは、ある種の仕掛けで、私たち普通の人よりも「高い位置」についたと実感できたときである。

アメリカの車椅子の最前線を紹介した。そこで紹介されていた車椅子は、私たちが見知っているあの車椅子ではない。火炎放射器付きの車椅子、キャタピラー付きでどんな山野も走れる戦車型車椅子、時速170キロは出るBMWのエンジン搭載の、超かっこいい車椅子用バイク。「普通よりもはるかに高いレベル」の車椅子に乗った時、「ざまあみやがれ、悔しかったらあんたも障害者になってみな」と、健常者を見返すことができる。これを弱者は望んでいた。

ところが私たちは福祉の対象者が、自分たちよりも高い位置に上ることを快く思っていない。福祉の対象者に提供するサービスのレベルは「普通より若干低めに」と考えている。「普通より若干低め」のサービスは、屈辱感をむしろ煽るだけだ。せいぜい「普通並み」の水準をめざしているが、弱者はそんなレベルにも満足しない。はっきり言うならば「普通よりもはるかに高いレベル」を求めているのだ。火炎放射器付き車椅子は、そんな彼らの鬱屈を解放してくれる。

(2)障害が障害でなくなるのなら

弱者は、自分が弱者であることを認めたくない。自分が障害を抱えている、病気を持っているということを認めたくない、意地でも、「それは障害ではない」と思いたい。

9頁で、義足のファッションモデルを紹介したが、義足は自分が障害を抱えていることの証拠ではない、逆に足を様々な状況でいかようにも取り換えることができる、むしろ有利な条件なのだと当人は言う。

「足がないことに新たな可能性が生まれるのです。義足はもはや喪失した足の代替品ではありません。それを身につける人が、そのスペースに自由に、創りたいものを創れるということです」。彼女は要するに「障害者」ではなくなった、のだ！

精神障害者の生活施設「べてるの家」が関係者の関心を呼んだ。彼らは精神障害を何とも思っていない。「私は統合失調症です」と公言する。人間関係で発症したのに、人間関係の極致ともいえるセールスを生業としている。そこでまた再発する。そのとき「再発した？ 順調順調」と言う。その後も彼らのことをルポした本が発行されたが、タイトルはなんと「治りませんように」。

<補足>一般人とは別の世界に入れるのなら

ここまで紹介した、車いすの話と、義足の話。この二つの事例には、もう一つの事実が隠されているような気もする。弱者が望んでいることは、一つは前述のように、一般の人よりも上に立てる、ということ。そしてもう一つは、一般の人とは別の道を歩める、別の世界に入れる、ということ。一般の人が歩む道から逸れて、別の道を歩めるとなった時、ある種の安らぎを得るものである。普通の道を弱者として歩み続けるのはつらい。ならば別の道に逸れたらどうか、というわけだ。

幾種類もの義足を取り替えながら往来を闊歩するとき、私はもはや他の人たちとは別人なのだ、というワクワクした気分になっているのではないか。火炎放射器付きの車椅子に乗っているとき、俺は他の連中とは違うのだ、敢えて言えば別人種なのだというウキウキした気分になっているのではないか。

何のためにそんな奇をてらった行動をするのかといぶかしむ人もいるだろうが、内実はそういう気分を求めているのかもしれない。この奇抜な乗り物、奇抜な義足で、私は別人種になっていくのだという。

(3)障害が逆に武器になるのなら

もっと発展して、障害はむしろ才能のことなのだという見方も生まれてきた。ADHD（注意欠陥多動性障害）。「不注意」「多動性」「衝動性」といった性質で知られる、正真正銘の障害の一種だ。この障害を持った人の中で、ビジネスやスポーツ界で成功を収めた人たちが多く誕生しているという。

アメリカ最大のコピーサービス店「キンコーズ」の創立者は、自身を「最高にA

DHD」と表現し、「じっとしてられない」ということは「エネルギーに動き回れる」ということと、障害を逆利用する方法を思いついた。彼は経営者でありながらオフィスに腰を落ち着けることなく、常にビジネスの最前線に身を置いてきたことが成功の要因になったと指摘している。障害は、ハンディキャップどころか、ビジネス活動を有利に進める武器となった。

障害者に何らかのサービスをしてくれる気持ちがあったら、むしろ障害者の潜在能力を発掘して、それで自活でき、福祉の対象という立場から「卒業」させてくれることを望んでいる。能力（闘いの武器）の開発こそが、弱者が切に望んでいる福祉だった。

(4)「ハンデをつけて」くれるのなら

福祉のめざす水準を、「普通以下」から少しレベルアップさせて「普通」に上げたでしょう。それを実現するには、欠かせない条件がある。もともとハンディのある人に「普通の支援」をしたところで、一般の人との格差は開く一方だ。ではどうしたらいいのか。「普通以上の支援」が必要なのだ。この理屈が意外に理解されていない。

クロネコヤマトの宅急便を開発した故小倉昌男さんがつくった障害者のパン屋「スワンベーカリー」が、障害者に月給10万円を保障しているという。パン作りをしている障害者の作業所は多いが、大抵は月1万円しか支給できていない。小倉さんのとった方法は何か。一流のパンメーカーの協力を取り付け、店は都内の一等地、クロネコからも優秀なスタッフを借り受け、店頭デザインもプロに依頼と、「普通以上」どころか、普通の店が涎を垂らすほどの超高級資源を投入した。

彼が次に狙った商品は「炭」だが、そのために日本一の炭焼き名人の協力を得ようとしていた。ゴルフのように、力が違いすぎる人たちでプレイする場合、ハンディを適用するだろう。その「ハンディをつける」のが本当の福祉なのだ。

(5)問題を自分で解決できるのなら

今、福祉は「セルフ」へ向けてひた走っている。抱えた問題を自分または仲間と助け合って解決していく。豊かな社会になるほど人々は誰かに助けをもらうこと自

体を嫌うようになる。これこそが弱者の心情なのだ。

子連れママたちがグループを作って、自分たちで助け合っている。子どもの預け合いをしたり、子連れ外出情報誌を作って仲間に配ったり、子連れコンサートを開いて、子連れママを招待したりと。

福祉関係者やボランティアに助けてもらおうと、プライドの危機になる。同じ悩みを抱えた仲間なら、いずれ私の方が担い手になれるチャンスも確実に巡ってくるから、助けてもらっても傷つくことはない。「同病相哀れむ」の心情もある。

(6)サービスの担い手になれるなら

先程紹介した、若年認知症の人の「ボランティアでならデイサービスに行く」という事例がこれに該当する。

「毎日毎日、『すまん、すまん』と（職員に）言うのも、くたびれた」と嘆いている利用者の声を耳にして、デイサービスの職員は翌日、自分の赤ん坊を連れてきて「この子の世話をお願い」と利用者に預けた。彼らが喜んだのは言うまでもない。こういうセンスが関係者に育っていかないと、いつまでも対象者は対象者でしかない。

(7)「豊かな生活」を応援してくれるなら

高齢者専門病院が寝たきりや認知症の人向けの化粧教室を開いた。2ヶ月たった頃、看護師が効果のほどを調べたら「認知症が治って自宅へ帰った」が1人。「おむつがとれた」が41人中11人もいた。「こんなきれいな顔におむつは合わない」とはずしてしまったと。

院長にも聞いてみた。「たかがお化粧で、そんなに効き目があるものなんですか？」と。すると、「それはたいへんなものだよ。いつもは院内を這っている人が、今日は化粧の日だというと立ってしまう」。医療のプロが、自分の医療技術でなく、ただの「おしゃれ」でこれだけの治療効果が出るのに驚いていた。

福祉といえば、対象者の安全を守ったり、困り事を解決してあげることだと考えるが、意外や本人はまず「豊かな生活をしたい」と思っている。豊かな生活をする中でしぜんに、当人の福祉・医療問題が解決していくというのがミソである。

(8) 一方的でなく、双方向の関係なら

先程の岡山のケースが、これに当たる。人間の心にも「貸借対照表」があるのかもしれない。人にお世話になるたびに負債が増える。逆に人の世話をすると資本が増える。

彼女の場合、負債が大きすぎるのだ。資本を増やせる相手は、彼女を食べ物にしている一人だけ。これだけバランスが崩れるとプライドの危機になる。こういう心理が彼女の不可思議な行動となって表れた。

人から善意を受けることは、負債感や屈辱感を伴う。だから地域では、一方的なサービスにせず、お返しができるような仕組みになっている。

双方向の話をして、関係者はあまり実感を持って捉えられていないのを見て、私はよくこういう話をする。近隣のSさんから、おすそ分けが来た。東北旅行で笹かまぼこを買ったと言って、その一部を持参してきた。カミさんはそれを「3000円ぐらいかな」と値踏みするが、「お返し」する物がない。しばらくはSさんの顔を見つらい、早くどこかへ旅行に行かねばと思う。その後北海道に旅行して、サケをSさんちに持っていった。これでようやく「借金」はチャラ。しかし今度はSさんがこれを値踏みする。「5000ぐらいかな」。自分がおすそ分けした分と差し引きで2000円の「借金」になる。そこでまたどこかへ旅行に行かなくっちゃと考える。こうやって、おすそ分けとお返しの循環が延々と続いていくのだ。こういう話を持ち出すと、ゲラゲラ笑いながら、そうか自分も双方向を望んでいるのだなと、はじめて納得するのだ。

(9) 「助けられた」とわからない福祉なら

東京に面白いデイサービスセンターがある。施設の看板には「デイサービスセンター」ではなく「工務店」。利用者の出で立ちば、あの工務店の従業員が身に着けている制服。「会社」に着くと、ガチャン。タイムカードを押す。名刺も各自持っている。「〇〇さーん。今日は□□保育園へ、××の修理に行つてね」「ハイよ」。むろん介助人付きだが、自分がデイサービスを受けているという実感がほぼないのではないか。

利用者がこういうサービス形態を望んでいるのは間違いなからう。しかし、今の関係者がこういう工夫をしなければならぬとは、考えていないのではないか。

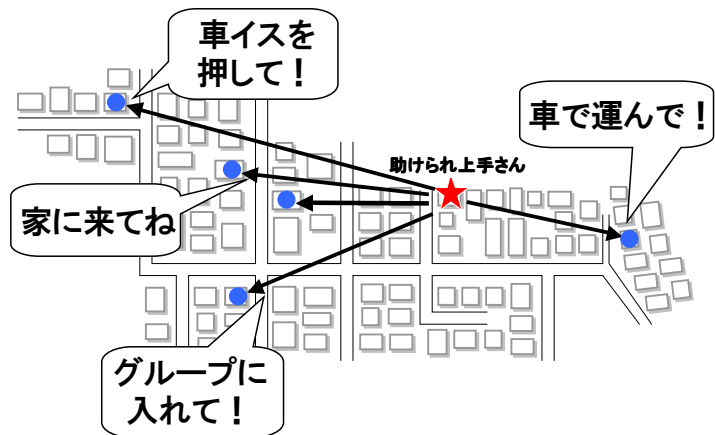
認知症の女性が街中を散歩しがてら、あちこちに顔を出していた。昔の同級生の家を訪れると「来ないで！」と言われる。グループで趣味活動をしている家を訪れると、「おヨメさん、迷惑だから寄越さないで」。ゲートボールをやっている所へ行くと、仲間に入れてくれる。サロンも、足元の井戸端会議にも入れてもらっていた。

彼女がやっていることを総合すると、彼女はデイサービスを利用していることにならないか。それもすべてを自分で選べる。今日は〇〇さんちで趣味を楽しもう、今日は〇〇さんちでふれあいサロンを楽しもう。しかも彼女はサービスを受けたという自覚が全くない。これこそ住民が求めている福祉なのだ。そう考えたら、今の福祉サービスのあり方は、まだ前世紀的な物と言われても仕方がない。

(10)福祉の主導権を握れるなら

広島市内で車椅子の夫を介護している高齢女性。夫を病院に連れて行く時は、町内会長に電話して、「移送をお願い！」。車椅子が側溝にはまったら「だれか手伝って！」。「私は介護で外に出られないから、〇さんと△さんと×さん、うちへ遊びに来てね」。「介護でストレスがたまっているから、あなたのグループに入れて」と趣味グループに声をかける。これにみんなが快く応じている。

見慣れた構図とは根本的に違っている。普通は一人の要援護者に、誰と誰がサービスに駆けつけている、と線は周りから当事者に走る。これはその反対で、すべての線が当事者からまわりの人へ向かっている。



何が違うのかというと、このマップでは当事者（の家族）が、福祉の営みの主導権を握っている。「あなたはこうして」「あなたは…」と。「セルフケアマネジメント」と言ったらどうか。自分のケアマネジメントを自分主導でしている。これぞ当事者主体の福祉、当事者が最高にプライドを守れる福祉なのだ。

9. 「弱者の戦略」としての福祉

■担い手は当事者の立場を本気で考えようとはしない

要援護者もこういう願いが叶えられれば、今よりは満足してサービスを受けられるのではないかと述べてきた。その一つ一つは、真に当事者の気持ちになれば、いちいち私に言われなくてもわかるはずなのだが、現実はそうでもない。おそらくはこれからも、当事者と担い手のすれ違いはずっとつづいていくのではないかと。

そこで言えるのは、当事者の側が改めてこういう事実を理解し、それに沿った戦略を練り、担い手に向かって要求するなり、自分たちで自分たちの納得できる福祉を作っていくより仕方がないのかもしれない。

弱者の戦略としての福祉である。弱者の立場からどういう福祉のあり方が望ましいかを考え、それをまず仲間同士で理解し合い、そのあるべき福祉を作っていく、または作らせていく。これぞ究極の当事者主体の福祉である。

■加害者側と被害者側の認識の「ずれ」は修復不可能

福知山線の事故の被害者遺族が、JR西日本のスタッフと、事故防止策の議論をしてきたことが、NHK「クローズアップ現代」の報道で明らかになった。はじめはJR側が渋った。それはそうだろう。今までこういう「研究会」は事実上、加害者側を「絞り上げる」場にすぎなかった。そこで被害者側が、絶対にそういうことはしないと約束することで、ようやく始まった。

議論の中で、興味深い点が出てきた。例えば被害者遺族の一人は、毎日現場を通過する電車に乗って、遅れがないかを調べてきた。その結果、やはり今のダイヤには無理があると訴えた。JR側の認識とは逆だった。

またJR側が提出した調査結果で、両者の評価が異なる部分があった。今のダイヤで「かなりのストレスがあった」と答えた運転手が全体のごくわずかな人だった（私の記憶違いでなければ、30人の運転手の3人だったか）。JR側は、この割合の低さに着目して、まあ全体としては無理なダイヤではないと結論付けた。しかし被害者側はその結果を見て、「えっ、3人も？」とびっくりしたというのだ。どうということかということ、わずかに3人だが、その運転手が事故を起こす確率が極め

て高い。実際に事故を起こせば、「低い確率」は関係ないのだ。

加害者側と被害者側の決定的な認識の「ずれ」であって、おそらくこの「ずれ」はこれからも、また他の問題でも埋まらないのではないか。だとすれば、究極の方法は、被害者側からの発想から事故防止策を提示すること以外にない。

■自助活動で社会の難題が解決している

今、こうした自助グループの活動が盛んになっている。インターネットで探ると、メーリングリストだけでも、数えきれないほどのグループができています。自身何らかの理由で屈託を抱えると、もうグループが作られるといった塩梅である。「生きづらさを抱えている女性の会」「片づけられない女の会」「子どもが苦手な教師の会」「牧師の妻の会」「夫在宅ストレス症候群の妻の会」などなど。

その活動も、なかなか味わいがある。それどころか、裁判で被害者が陳述することができるようになったのも、殺人の時効が廃止されたのも、自助活動の成果なのだ。こうした社会的に意義ある成果を出すことができるのは自助グループしかないとも言える。自助グループが動かないと社会の難題は解決しにくいのだ。

数年前だったか、息子をオートバイ事故で亡くした父親の活動が話題になった。現場検証の結果は息子の過失だとされた。しかし死人に口なしである。ドライブレコーダーが搭載されていたらと思った彼は、まず技術者として仲間と一緒にドライブレコーダーの研究を始めた。他方で、トヨタの株を買い、株主総会に出席して、ドライブレコーダーをトヨタ車が標準搭載するように訴え、前向きな回答を得た。

シニア男性といえ、**「地域デビュー」「生きがい対策」**の対象者と理解されているが、福知山線の被害者遺族は、それとはまったく違った人に見えた。何らかの当事者（被害者とか）の立場になった時、彼らも見違えるような活動を始めるのだ。それぞれが当事者の立ち位置から行動を始めればよいのである。

■「当事者学」を幼児から教えられるべし

当事者学というものを確立していく必要がある。お互いに何らかの当事者になる機会は、確実に訪れる。その時当事者としてしっかりした活動ができるように、幼児から教えられる必要があるのだ。

イギリスの赤ん坊が初めてしゃべる言葉は「イツ、アンフェア！」だと聞いたことがある。自分は正当な扱いを受けているかどうか、という自覚を持たせることから、幼児教育は始まるというわけだ。

NHKの「おはよう日本」でこんな光景があった。ある小学校のクラス。女性の先生だったと思うが、突然、「セーノ」と叫んだ。するとクラスの子供全員が一斉に叫んだのである。「助けて〜」。これもまた当事者教育だ。

今の福祉教育（専門教育も含めて）は、担い手の立場からのあり方を教えるものばかり。当事者の側からの立場や、考え方、行動を教える教科はナッシングである。これでは、当事者のことが分からないはずである。

私は「助けられ上手講座」を開くように関係者に勧めている。これも当事者学の中の1つである。受講者はどちらかといえば地域活動のリーダーやボランティア、関係者が多い。彼らに受講の感想を書いてもらおうと、「これからも要援護者のために頑張っていきたい」と書いてくる人が少なくない。講師の言っていることが頭に入っていないらしい。というより、自分が「人に助けられる立場」になること自体、心が受け付けられないのだ。

各自、人間らしい生き方をしたい、自己実現を図りたいと強く願う。それが実現しているかどうかを評価し、実現していないとわかると、その解決行動を始める。必要ならば、地域や関係機関に要求する。その前に仲間と一緒に問題解決行動を起こす。これら一連の当事者としての行動をきちんととれる人材を育成するのだ。算数、国語を教える前にすべきことがこれである。